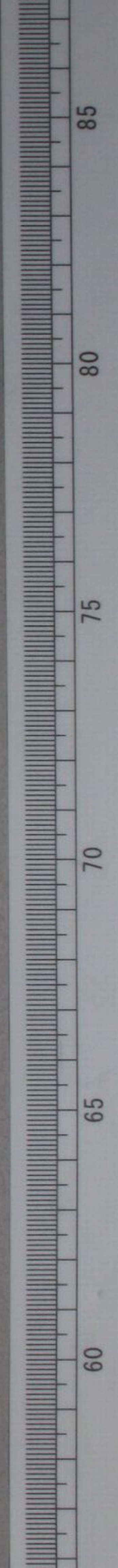


中村俊定文庫
文庫 18
254



誨言庭訓

古學

元文六年

祇德撰

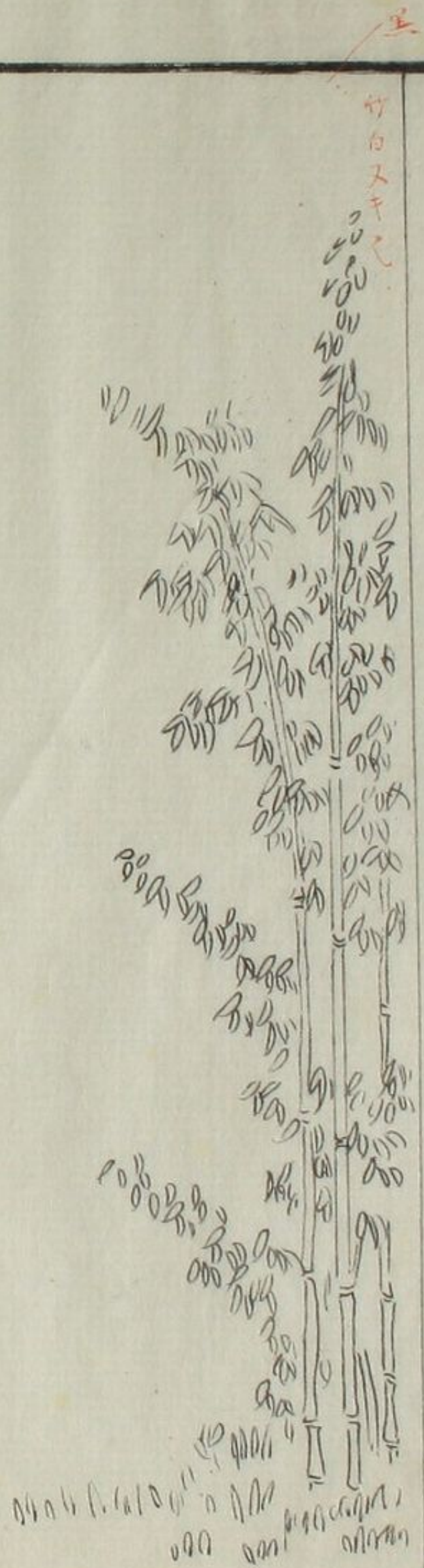


白字

11

東都

竹隱祇德著述



乙言庭訓

古學門子五書三經ありそ此書總より
攬擷して嚮う五條目然して世今
亦むとある。此庭の訓張抜率して
一帖と申す竹中が擷公範より傳ふ多し
皆りる。とあり儒家は一言以蔽之
佛家もは雖誦千言我心不滅不如
一与とあり書雖ハ全く芳譚あり

一 一言能社中人以饒益と爲す
一 古學門に仁齋祖來兩派の名目より心
つふふさるにあらざるを爲してはる
を軀を行ふ詭諧を収めたる者も亦
孔子古之學者爲己といふ事ありあり
本つゝ

一 爲己にして而后今及らざる人ありあり
而后世にむろまは是等の人をば

師範乃器とつゝあり

一 持て詭諧は今日あり

一 一卷を小世界なり

一 是のいかりは名目にして實は世を
一 一と歌ふ一及び平日古今集あり
一 一と言篇を用ふと一と母はまはる處ハ
一 言篇人篇は論ふ一 論を志す人
一 乃争論淺く一と我とす

一 卷中皆世間此盛衰有爲轉變此理を
觀——仁義五常の存り有りて佛神の
冥意は作られたりつゝ 勸善懲惡は
一 卷ふれど夫若貴賤の今日とつゝ 吾身を
かたみりては詭計ありやん 世にふ
一 世間六二卷に——士農工商高比が今日とい
かいてあるや

一 風雅の録 くくく おん 五七 こ ん ん ん

さう人もその人の生前皆今日此詭計や
一 口り金言妙あり——今日此詭計あり
人らをもたし詭計や

一 父母孝をたし——族子むつま——家
頼るありとも世に皆今日此詭計や
一 朋友と交わりてハ附合を才——
まの附合の能く—— お 張 の あ ま い ん
あり可考

一人の親姑たるのしびあはるむにさへん
道の渡季もあらずとて都調りなむ
子ももていひていひていひていひて
け道は深人ぬ或は淫室もあらず
博奕も文も媒も心得る學も禁め
さるるいひていひていひていひて
時名利も趨き我慢愈熾り道
は去る愈遠しとていひていひて

とあらず屈執して自讃毀他一果ハ
職も急の業もわすれ家も
ふり事習敬にけきあや多
は愁も懐くとも母時をわすれ
ちのころ自在菴の祖宗とあむ日
社中面會誹諍りあつた已り初老乃
年を待てく——物も愚存の管見
るあらずと

凡月よめ家業の里一笠乃事

誅學校の聖に題一わのきりく
教戒の句也

一詠銘の詩をびく一和交と母と連交
を又とん

一詩の胤を和哥に孕く詠銘の出生をらや
連歌を放くはやまのいれ多のみは
用いこからこいば言と不用仍く詩を

父とまゝいよあつた吾乃の夢に音
ひまゝと和漢合これ道あはし待をよ
定む世

一古今集に詠諧歌より五吾乃の名出生
まゝ和の和交を母と極世

一式法先まお生まはく連歌を見れば
いよ一の連歌に今に詠諧ありあ
くハ五書と見ん

一 誹諧之道乃末第に(三)て父母兄の三道
を教ふべし一家才に必らざるも利養明
にても父母の恩を乞はあつゝを教ふべし
も邪路放逸の道より入らば承く父母兄の
勅氣孤世承り何ぞ詩哥連誹乃四雅と
いふべし

一 詩父の風骨歌母の姿情兄連の毛車
風流ふるもや末誹の風塵を野談ふる

を合(二)こころ存る天地の間よりいふべし
誹諧あらざるもいつやまの法(一)誠り自
在に一道やあるを以て儒佛道神皆
吾家の誹諧よりありけり四教道と異
にても互らば是非をあらそふといふべし
誹諧の巻を本心とすこれに所をあら
鈕を教ふも中臣を唱へ念佛は孔子益
をさるる老莊を教へ仁といふ義といふ

者との無事なる母ひと
 之らさしむるに四教を憎む
 信心急なりふれと印の本旨とあり
 一 吾家より五等之大綱とて時を刻ん
 得べき事あり
 一 和合は誦語あり
 二 安民のといふあり
 三 言行の誦語あり

四 知足の誦語あり
 五 多識のといふあり
 一 和合といふは君臣和合は花實お對
 しては道は要務は師弟社友
 乃中むつとて互に補助を
 非を行ふ時の諫言とて是に
 之をさす時とて異見を加ふ諫
 ありとて人より諷諫は凡諫也

まよひたる人今も求む諫をなほし
連衆の中何れも時を廢學の本
とあり

一 羣羊而不黨とて和を以て衆の處
あり。然もも衆ありて禮なき
は乱るるもの如卷みふ禮讓の教を
あはれ常りし禮讓とわたりぬ
今日れ和合を卷み和合をとなすこと

例の世卷じ一致しとて日く旬々乃
和合ありて

一 軸の方宅一挺の墨、折やはしく
筆を十本つもの墨を平挺りし
福を折らし、圃に徳をそむき
考と六とは不知ありとも和合の
誹謗を知らざりたりや

一 安民とてわたりし世安民して

衣食住の三つとありは今日
安樂ありて誰誰をきりは
ありこゝろを非難あり

一言行といふ言の行と驅り
行ふといふ言を一致せしむる
萬世の隨金ふれと一句一卷は明鏡
子心頭と思ふして君といふあり
中心を忘るは此際親といふあり

子ハ孝親をまじは付へ友と云
前句には信を忘るは粘り
時をいやはまじは付へ
門下程はまじは付へ
つゝら道は叶ふ

一知足といふは欲知足
吾門の要は古徳あり
とて句とて金聲あり

あらしは一代乃秀逸十句十句ある
も乃やうと吊ると思ふ愚
の甚しきものい句上り名利を
捨てる巻中より名聞を思ひ出
例乃造物のあまひけ成待と
その座より興をばふは是を
ると思ふ句も毎事居るなりや
一知足をあらうとむを必り進吟と

ふるや

一知足をあらうとむを必り進吟と
あまひけ成待と
その座より興をばふは是を
ると思ふ句も毎事居るなりや
一知足をあらうとむを必り進吟と
あまひけ成待と
その座より興をばふは是を
ると思ふ句も毎事居るなりや
一知足をあらうとむを必り進吟と

一手治あしき時う語りた徳身
短冊画賢木認むへし大徳知足

ふり

一 此の句盛なりと云ふは
句衰事あるは句并に其時
はは道教子とせし換すは
思へる人も句教しはま
こころも時ハ詠を廢し
思ふもやまは終るは
やむ終人あり

一 層々登る時必らしは句
あぬるをら終るは又
知足をたるは

一 多識と云ふは多識草木禽獸
名との如し李の數品
諸國の名産萬邦の名
官名士農工商の業俗
平話
多識なり

一 儒佛道神之書歌書軍書抄
みちの記技藝之書との外抄もるま
雑書まき一帛とありておのまき
性より記を抄よみかか良し
るも誦誦乃多識あり

一 古學子門り九ヶ之付方といふ

句作之四道

添順離逆

趣向之五道

人時天心處

四道の連歌の古法り
一 五道の不接り
新制衣也

一 句の調とあると古學問のふらひ也
一 又侘といふ清といふ事あり
一 かつこの名目と身とをまきといふ事一也
吾門乃道術也

一 百歩之吟ハ一庭乃興
是又吾門の新制衣なり句り達者

とけり人々為や夕月ハ七中ノ詩ヲ
本にあり

一 丑刻歌仙。寸香。三言。句舍。
句評。判聲。百會

右之名月朗人おきよありて後以
乃仕方あり

一 吾家より小座鋪別所を建て
五人結乃詠詠あり

一 吾家の國字詩ハ他門とつふふの
詩や志のて六の世を居るらん

一 点取を嫌ふ事無基お的哉
六の老と師教る多ふ如し

一 点の道の階梯より一確興乃
ものるれと初字おきみけみハ

まろしとれと心上そよむ詠詠
とハ雲沈のようあり吾家の點

職心坊方なき事や

一詭誑ハ享祿天文之以道權輿

一一今世擧るは夕乃遊

興一なを

一一道ハ貞徳あり句ハ色蕉あり

一一深り古く一やいふ

一一秀逸ハ必此虚毎自然の妙あり

一一いふお一のや是古字門の決定

一一るり一事と笑一所一降一降一の
造物天に乃ある一我一行一く一意一

一詭誑乃修行ハ後世者り似一あり

一父母一と一妻一子一と一弃一る一世一乃一桎一梏

一一を一離一ま一る一出家一遁一世一出一る一ハ今日

一詭誑乃本一言一あり一ん

一初一産業一と一た一も一あ一る一力一を一

一一み中一以一業中一隠一を一試一

後より凡雅乃ち左隠と云ふ是れ
 修行乃ち初中後と云ふ大の次中より
 遊々として壯年以て樹下石上の
 志ありとも何由及乃好癖なり
 一 詠詠ハ愚を勤むる事平素乃ん
 ぬるなり
 一 近くを捨て遠くを求むるなり
 一 阿るひと道四十五より起るといふ

微軀敢て一言階んや亦賢く
 元文五禊晚冬念五後園乃
 竹徑をめぐり別廬ある水光洞
 たり未あらし竹隠者祇徳志る年



右定本 門人 冥疑齋祇長 寫
 東天坊獨林

右言庭訓者竹隱先生之所著也
門人傳錄之本條不一謄寫轉訛
學士憾焉恐其遺疑誤於遠境
今茲正月速乞定本壽諸文梓
以貽同好

元文六年辛酉孟春
雲中子水室
夏炉齋久扇

五書

古學談

古學辨

古學論

古學解

古學式

三經

國字經

漢字經

密經

二典

天長記

地久抄

水岩洞のわらわら大百歩場
 ありて興行あまのこひそ乃
 中乃二二を採くは集り
 附録さるる道場りは教経
 法永くともさるる施主乃
 くらげくもや
 自在庵
 執事

百歩之吟

橋北連

柴舟胡蝶

柴舟必以つる旅路のみあり
揮

祇長

白牡丹

草々名花ありて白牡丹

題初雪

初雪如昔の如く乃人出る

石上落葉

散也世乃花之半空に石の上 水室

雪中鉢扣

瓢箪は雪に片はら鉢を

湖上鳥

涼さよ湖子鳥乃清野鳥 冬扇

名月速子

名月の速子さつめ親の音

名所郭云

名所郭の噂うらまはれは 祇貫

坂下砦

坂上りや本魂は小坂さめ

夕暮はれは

戸の接待合をさつめ 祇南

松原茸狩

松原の茸は穀よむ夕日影

市中万歳

万歳と詠ふかさし袖乃空 祇貞

題鶏頭

鶏頭の浮世を似る花

雨日琵琶

琵琶此方かゝる雨夜啼陸 竹亭

曙帰

人は今帰るやもはかから

寐芝郭公

あ乃夢に寐し夢のまの時を 獨林

晴天時雨

浩穽不日や松風のくまが

月夜煤拂

煤拂や宵よまよさぬ月此ら

橋南連

日中れかんある。

啼や久いさるるま壺そゆふも 素隠

夜行疑雨散

路やみそやあらしは星月相

夕暮の貝むらさ

院ありあたえらゆの志貝 祇實

関前穂尾

穂首やさふから秋の空かんち

少年行

楊柳の葉さほら 花の山 祇天

関西埋火

埋火や親事事ふる新柳

昨日赤枯

木かしらやふか静けき大社 祇幽

釜中鶏

煤と力や釜子落るる鶏の糞

水上蝶

花あらし散や小蝶はあま加へ

柴西

庭上初雪

初雪やまはれしつゆのしほ

河邊千尋

初雪しつゆ貫くはなや川ちり

沖光

古寺紅葉

入相れは初雪のあま寺のみち

閑日蝶

蝶はあまのあまのあまのあま

梢雨

鬼さき

菊人乃心あつたまの鬼さき

海上遊

我あまのあまのあまのあま

流光

奇葬述懷

朝息代春秋心より日心也

社頭三月

鯉本幸かく心新也夜月

祇来

岩間窓

骨此留りて心も此に心

古城若竹

菽垣也城はしりて心

林泉

旅泊乃み

面のみく心も此に心旅宿

遠連

大内名目

二本松

若月や心も此に心

祇蕉

鈴鹿山霞

西教婦の心も此に心

闇夜雪催

櫻川

雪や夕月此晦乃落あるを 風徳

園中雪

雪や音紙振わぬ梅柳

百歩吟終

跋六章 古學詞宗

雪ふ心得白の如

梅乃

義

祇明

關口乃碓房り入る

飯子黄く

雪六涼しや水車

からしと明るる

雪一赤の目

獨寐如夢此即乃昔故至結うら 空翠

白蘇也 いひまじい 善く及ぶ

可うん いひまじい 我よりゆき

惣門人三百有余輩

彫工芥澤 彦七

江戸日本橋二所目
書林 戸倉屋喜兵衛

昭和十四年八月二十日寫了

俊定 翁

